和田開明
定節
編輯

小説

春雨文庫

第五號

上

010190509503

A416
9

梅亭金鶴閲
和田定節編輯

開明小説

春雨文庫

東京書肆 文永堂

48-7527

叙

此書始名春雨文庫と号し編を
終ぬるに及ぶを重て昌平文庫浅草文
庫の如く巻を積て金澤文庫と齊しく
其名を高くせんとの故を以て
大家伸夫なるが家を越中犢泉禪
寺に向ふれども是を自分と其座を

家鴨ゝ皆負せて文庫程みも
ち従ぎらしを春雨の雪と共に大人が
繰り初め後を和田のはら定世郎大人が
絵ゝらるれば其の日の二巻きを手に海か
面の廣きを秋りし故ちなべし
船を言へまして文庫の建り中居
と土臺と腐らす為何様てを真

事の文庫と成る迄格元を添ても
編者ゝ迫り成稿の早からんを保
証ず立て印紙代りの序書を作る
耳南也

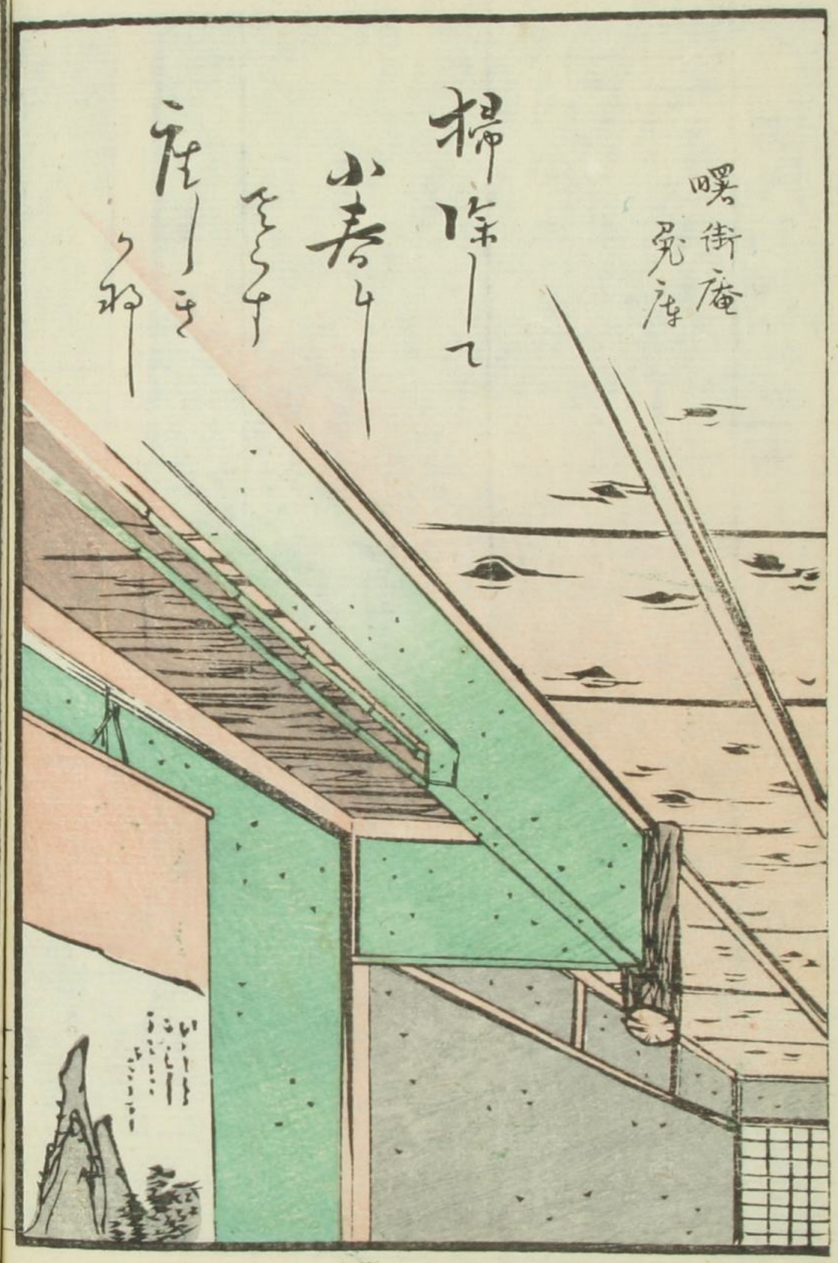
籟の菊花に相る傲る時

蠹白秋園頌湖誌

安達吟光

出世和河吉
低し
星月夜
梅堤

字真かも
とうとう
かるる
秋の雨
燈盤



春雨文庫第五編巻之上

東京　和田定節編集

○第十七回

門守る犬の遠吠も按ず針呼ぶ笛の音も繁花と漏れて遠方ふ聞けど淋しさ最増して同じ都も田舎めく町屋をづもい差し昇る月ふ障りの無ものから往来の人ハ絶ぐふて遥ゥふ促ゲす東福寺の

鐘ボオン折から息せき俵屋清兵衛来かゝりたりしが立止り耳を聳て指を折り八テ彼ハまゝ爰刺大きゝ遅く成て嘸御両所ゲお待どうで有うと私語るゞゝ往かゝる北野の社の大門通り傍の松の木蔭から「此處ゞゝ清兵衛てゞト呼止られ俵屋四邊を見まゝして月の明りゝ木蔭を窺ひ腰を屈めて竊々来り「桂さゝゝゝ中村さゝでゝ社ゝ外ろイヤ最う天の口壁の耳を避ませうと思ふと何や

彼やゝて間を取り大きゝ遅ろうろうまゝして お待どう桂「ア、否ゝゝ拙者共も今がゝと参つさシテ守護職の容子ハ如何ぢや清「然れど其領地會津よりして追々人數を操り込を来り所司代もまゝと桑名より人を集むる者の模様ハ全く破烈の准備と思れます中一然て見れど此方ゝも三條公と始あとして他の六卿へ申ゝ上豫め心組とせずハ成まい彼の浪士らゞ催ふて再度江戸の牙城を焼落さんとの企ハ如何

るりこう清「當十一月五日御殿法きハ言を待ず中
著門より三重の櫓それふ漬きし多門まで見事ふ
焼亡せし容子と聞て思ハず小膝を進め吐息つき
つゝ歎ゞて言ふ桂「嗚呼徳川氏の末るゝと此件ふ
ても知りぬべし石を堅こ鐵ふて漬き板ハ薄きも
尺と以てし柱ハ抱へて手ふ餘る堅固無双の建築ゑ
れを焼草火薬を用ひゞ格別容易ふ火の附たづゑ
きと一度ゑらず三度四度仮令附人の有れとて
安々とこの成るハ何ぞや夫のそゑ〳〵ゞ近きふ到り古
来稀ゑる江戸市中の大地震法ゞいて大風まゝ未曾
有の病虎烈刺ゑゞ言ふりの流行し人死することと
莫大ふて加ふるふ痳疹もまゝ人を殺すこと夥ゞし
諸國年々大水し米價日々高きふ至まを貧民寺
院ふ屯とゑし旗を翩へし幟を押立て町奉行の役
館ふ迫ゑるとうハ實ふ前代未聞ゑう國家將ふ亡び
んとす必妖孽なり江戸の本城かゝ易々焼亡する

如きふてい會津桑名の人々ら力と將軍の為ふ盡すも敢て恐るゝふ足らず我輩ら本國へ引き取るい今四五日容子と見合せて後為ぞ可ららん中村君の尊慮いらん中「勿論の事るり我輩ゞ本國へ退んと為るい暫く幕威を遁んと做るの故ふ因るるり然ると仰の如く牙城西城建てい焼け建てい焼する最早武運の末みて俗ふ言ふ天道の悪しきと清しきらん會津桑名人數を増し見巡り組新撰組ら何千人集るとも事あるふ莅と踏ちらさんい易からん今三四日たゞ大島へ往と る西郷吉之助の模様も分るべきるれを出立い見合せの方御同意るり如何ふ横田氏足下とも此程頻りふ幕府の者らゞ狙うよしるれを用心專一かるらず油断い做し難からん桂「實ふ勤王の志厚き い武士も及ばね横田氏七卿の方々も力ふ思召し在らせらるるとを此末とも何らの事を賴を入るとい言

ふりの〻幕府の者らゞ既ふ足下ふ迫らんと為る
よし故一まづ長州へ身を遁させんと既ふ支度を
も致せし程のことゝて弥彼の地へ往までハ人目ふ
掛らぬところふ身を忍び必ず軽却舎るゝと做
し給ひぞ清「私も身の放埒を世間ふ示し攘夷鎖
港などの話しハ嘆氣ふも口へ出しませぬゞ隠す
事の現れ易く誰言ふとなく清兵衛ハ勤王家
の提灯持などゝ風聞する者あるふ因り自然守護
職所司代とうの官吏の耳ふ入り附狙うよしなれば
片時油断ハ致さず先ハ何處までも切り抜る積りで
御坐ります中「桂君の仰の如く我輩らゞ本國へ出
立のとハ今四五日模様を見と上ふ為るゝ其つも
りふて手配あられよ清「かしこまりはしと何分同志
の黨の退屈いさぐる様ふん取計らひ下されと
桂「ありしも夫ハ肝要のことゝ然さゞ横田氏足下の妻君
ハ實ふ貞節なりの餘り苦労をかけぬゞ宜ぞへ中一

何様おの魂の堅固るゐ我輩とくと見とあこり足下ゲ何ゐど懶惰と極あてもも自狂ごるぞとて永性い致さぬ保証ふい両人ゲ立あ〳〵と訳でい長州へ出立の時の別れい嘸と想像らるも勾當の内侍ゐ別れ〳〵新田義貞の例ふ倣ひてい成ぬぞョと言れ清兵衛い天窓を掻き「是い憂とお嬲り何の事やら私しゐい一向ゴけゲ訳りません桂「ア〳〵いや程無く解る深物語りのとも有うサ中「何ゲ浮氣者板でも小常ゐん

ぞい宜加減ふ投つて仕舞ゲ宜ク
らうと言ひつ清兵衛の背中を
破とうつとき松の枝かゝ滴る
夜露パ多〳〵

○お岩い次男庄
吉の二歳ふるる
ふ乳を飲せ惣領
徳太郎の四歳ふるるふ

百人首を出しその画を見せるゞ〳〵岩「始めふ在る
のハ天智天皇さまのお歌で秋の田の夫〳〵何と言
とッけ坊ハ覚えてお在どらう教えて頂戴ると言
れ徳太郎まハらぬ舌で「仮ふの庵の岩「夫から
徳「とまをあらを岩「ろんふ怜悧どそ左様上手ふ
成ていお父さゞ古褒美ふ宜敷弄物をお土産
ふ澤山下さいませうさア〳〵此度ハ坊ゞ画を出して
母さんふ見せて下され庄吉ゞ寝ねするまゞ母さん

ハ御本を明て居られるハからト言れて徳太郎ハ百
人一首の本を開き「母ちやま是ハ岩「どれ〳〵オヤ夫ハ
壬生忠見坊ふよめますう徳太郎ハ膝へ手をつき「
恋すてふ我名ハまゞきたちふけり岩「夫〳〵徳「人
ちへずこそ思ひそめちゞ岩「オヽ能覚えさそドレ〳〵
お菓子を遣りませうト茶箪笥の引出しより菓
子取りゝゞして徳太郎ふ與えるゞ〳〵ホッと息た
き岩「恋をる身ふハ限らず人ハ知らずと思ふ間ふ

憂名はやく立りのみて夫清兵衛が勤王家とや
らと共み外國人と日本へ寄ねやうみ仕様とまるこ
へ深く隠しゝ此身と始め母さまや妹のお楽さん
みも話さねと守護職さまや所司代さゝでたや
知りて清兵衛と捕えんとするとの事もゑ様の
様み災難の来ぬやうみと夫が常み信心の北野さ
まへ人み隠して毎夜〳〵お参りすれば早寅吉へ
知つて居て淋しい所みゆゝの待ぶせ此方の心も知
らずいで仇否らしひ口説ど恥かしてと思ひても大
事の主人の小事より破れを起してへ成らぬト張さ
く胸の悔しさを堪えゝ居れば宜とみして悪ふき
け併折よくお侍さゝのお助けみ其場を程よく道れ
さへ全く天神さまのお救ひで有う何卒夫の浮名
とも天神さまの御利益で道れまさる様みお願ひ
申します何様もゆゝのお侍さゝへ桂さゝの様みお
声とへ思つさが何ゝ仔細の有り氣もゑお禮も宜

う申さず急いで逃て仕舞さい今さら氣がゝり夫ふ附ても寅吉いまう来い仕まひう左様ゐれむ宜いが此身の口ゝゝ愛相盡ーと言と訳でいるゝお侍さまが藪から棒ゐ出て投り出ーたのどから彼の様ゐ厚皮でい何とゝ名と附けまゝ来るゐ違ひあるまひ困ゝと事ゐい最今夜ゝゝ氣味が悪くゝ一人でい北野さまゝ往ず然言て晝間い目ゐさつ嗚呼何様ゐゝら宜らうト衿ゐ頤さー入きて思案ゐ餘る甚の顔を徳太郎い覗き上げ「母ちやゐ氣分が悪いゝや坊い大人ーう御本を見る程ゐ母ちやまも氣分と宜くゝゝ大人ーう遊んでやト言れてお岩い心附「イヲゝ母ちやんい氣分い悪くい床座いませんか百人首のお歌を見ませうドレ何様ゐ画が有りまさ徳「是い平の無盛ー忍ぶへど色ゐ出ゐけり我が意い後い母ちやんが坊い忘へとゝや岩「とのやおもふと人の問ふまでト言ひゝ再ゝび溜息つき「ホンニ

幼稚子どもが近気分が悪いかと問はる程の物が
りひと為る女房が比べて為せる亭主の身が成
るとその物思ひい何だろう小常の色香を表ー
て包めど早晩勤王の同志の招き穂が現れ野末
の芒色が出るより終が上の耳が入り薄い氷を
踏やうな一日〻〻の憂き世渡り今の世間の模様でい迚も
無事がい凌げまいの嗚呼困つてとまると溜息吐いが案ずて
徳太郎「母ァちやま未だ気色が悪いかやト言れて

再さびんが附「オ、ろんがと笑顔を作り「何の気分が
悪からう坊が大人しくお在ざと母ァさんい何時で
も嬉しくつて居りますト言ひ掛け耳を倚て二階
を窺がひ少し考え「オヤ〻父さんがお目覚が成さ
と見えるタァいお帰りが丑刻過で有さうう未だ
お寝てで有うと思つてさが去来〻〻お二階へ往て
お床を揚て来ませう坊い此處が大人しく待てお
在と言ひつ眠り庄吉と下が寝ろうして四辺見ま

い〜二階へ往んと為る時ふ階子をミシ〜下り来る清兵衛お岩い二階の口ふ立止り「オヤ大さう早うお目覚でございま〜と清兵衛い欠とあるゞ〜「誰も来やァあるンとう 岩「ハイ何方もお出でい法ないません徳太郎い清兵衛と見て「父ちゃん御気よう 岩「貴君徳坊がお辞宜でございます 清「イヤ大分怜悧う成さると天窓を撫る時何やら勝手で撰墮裡と倒る音ふ清兵衛身がまへ「エ、エ恟り〜と

第十八回

徳川将軍家茂公近きふ上洛あらんとて守護職所司代その他関東の士い容意とりゞるるゆゑ勤王の輩と穿鑿して捕えんと為ると倍厳るれい横田清兵衛とも縛さんとと為るの様子なれども薩長土の士後方ふ扣え且清兵衛い剣術柔術ふ勝れと丈夫なるを以て捕り害るつて却て害と引き出さんうとの懸念ゆゑ只その動静と窺ふのと會

子規
芝麦

津桑名の両藩ゐても容易ゐ手と下すことと做さで
り清兵衛も是と知るゐ油断せずゐゐ先計町
の藤村へも表向ゐ往ず家ゐも又尻と落着ず然
れば前夜も北野の社地ゐて桂中村の両氏ゐ別を
夜更人しづまりて後竊ゐ我家へ戻りしゐり女房
お岩ハ大概それと察して居る故見世の者ゐも清兵
衛の居ると成るたけ知らさず奥の間ゐ置き留守
の体ゐて扱へば今朝も飯ごしらへ拵お岩の手づか
らして清兵衛ハ食事も仕まひ火鉢の側ゐ煙草と
呑ゐゐ心の裡ゐ思ふやう夕ア北野で桂さゐや中
村さゐの御決議ゐ今四五日幕府の官吏の模様と
窺ゐひ當地と出立するとの約條然も無と今日
ゐ母御や妹ゐ名残りお岩と始め徳太郎や庄吉
の顔も一時見おさめで長門の地へ発足するとて
ろで有とゐ悄々ゐゐ又四五日ハ落着尻小常ら
の芝居も言を別盃ゐ出立の前日ゐ宜いと思

ひタア遅くい成さけれども拵屋へ往き延しく来
と母兄妹や女房子ゐ是で一生の別れと成ら紛む
宜い我女房ゐがくお岩い貞實ゐるうへ才氣も人
ゐ勝れされた仮令志と果さずして半途ゐ死もと
も勤王の人々意と得ぬた何様ゐり彼様ゐり母
と養ひ二人の子供と養育するゐ事い欠ぬと信
ぜれども幕府の勢ひまだ盛んゐる時い如何
ゐる崇りの有んも知れず若し左様ゐると何ゐ
も知らぬ徳太郎や庄吉までゲ草葉の肥しこ成りて
果ん思へば不愍と胸塞ゲりすやく眠りし庄吉の顔ゐ
見やりて居さりしゲ清ハヨお岩自已も不斗しと事か
らして内と外ゐる放埒ゐ愛相ゲ盡く居やうけれど
少しも悪い顔と見せず慈母と大事ゐして呉れ妹お
楽ゐ目と掛け徳太郎や庄吉を宜く教育しく呉
れるからもア何よりろ一ツの安心此ごろの商法い往
昔と違ひ買出しゲ肝心ゐ去来船ゲ出帆をると

言やア出先から直ぐ江戸へ走るゝ又ハ長崎へ往ゝ
或ハ支那の上海香港へ渡るゝ知れぬゲ若その様
な事でも有さら自己の今の放埒と恨まず年よ
つゝ者や幼稚子を無理でも有うゲ詰らぬ役割
ふ生れ合せて来さのごと諦め何卒世話と持むと
言て今日や明日出かける様な山もえぬゲ大坂兵
庫へハ月ゐ何度とるゝ往ゐ往ゐ先から出ぬと
も言れぬ何方へ何様しても百里二百里離れと旅殊
ふ一寸下ハ地獄と言ふ譬へへの有る船路寐て居てさ
へ日外の江戸の大地震の様ふ潰されて死ぬ人ゐ多れ
ゐ増して危うい浪の上トボンと轉倒さるゝ脚長
島や手長島腹の無い國へ吹流されるゝ夫も知れ
ずト言ふと見世ふさん居つて居れゐ何様やら彼様
やら商賣の出来るものヲ餘計な事と思ふざら
うゲ其処ゲ年来御恩ふ成さ渡世の冥利ト詰らぬ
所へ意地を張るのも持さゲ病ひの大和魂ひト言やア

書生の大言らしいゞ命と的ゐかけても儲け様との
慾い無つさを外國人らゞ來て他の國い暴しでも已
れの利益を計り巨萬の富を得るの我んてから此
方も少しをの根生を傳染させられさのサと話す
とゐ岩い炭次かけし火箸と灰ゐ突立さまく聞居
さしゞ備い企てし密事の追々迫り天子さゐゞあ
旗揚とやらを為さるゝう左様で無れを守護職
さゐや所司代さゐの穿儀強さゐ身を隠さんと為
るゐや有んと推量りてい今更ゐ胸躍をども止さゞ
宜う止ずゐ置のゞ身の為う分ち無れを哀しさの涙を
飲こを笑顔とはくり岩オホヽヽ何の役ゐい立ぬ私ゐ名
お心助けゐも成りません餘儀ないい訳のお有んゐさ
るとい言ゐゞゝ家程楽いものヲ他所へお寐泊
りのお心支ひい御容子でも知れて居りお厭しい事を
と思ひまたを肘を痛め片時休まる間い法ない
ませ祢ど力及ぬ女の身せあて貴君のお代りゐ

慈母さまやお楽さんのお気の易い様子て上げ申
し徳太郎お實語教の一條も覚えさせ庄吉お虫気
の出ぬ様育てますと吾倘の役と思つて居ります
ら近い所へお在のあり幾日お帰りがなつても貴君
の御無事と祈りますのをお按事申しい致しませね
ど遠いところへお出ぐ有り殊お船でい悪い風お遇
と難難を為るりのと聞て居りました故お母さまの
お心をお察し申し徳太郎や庄吉のをと思ひまもと
ば哀しいい山ぐるれど是まで安穏お私しどもをお養
ひ下さいます渡世の恩義で見世のお為と思しめ！
旅へ往ねばあらぬとあり無理お止い申しません
お留守の所い身を摧いても私しが見世の人達を相
手ふしてお母さまや徳太郎庄吉いお頼り申します
ば只今もお話しの通り寝て居て死る人もあれば老
少不定の譬へと思ふと貴君のお身の上だうでい
ちくお母さまへお年も多く吾倘の身や徳太郎庄

吉とてもいつ何時どんな病ひを取り附れ若もの事
の有るまいものでいざ往いません夫と思ふしお出
先から直ぐお立ち成るやうでの餘所へお出の度毎ふ
今がお顔の見おさめふ成りませまいう是ゞ旅路の
お別れうと思へば女の心くゝ励ます気でも哀しく
成り涙を飜す様なとでい貴君も不祥ふ思ーめーま
せうしお母さゝやお楽さんふ見咎められまい物で
も往いません是だゝかりい吉を理う知れませんが

一言是ゝう立と
仰ゝやり聞せて下
さる譯ふの
往ません。エ
若し貴君。エ貴君
と思いず潤む涙の
目ゝと子ふい見せ
ドと顔を背けても德

太郎ハ覗き揚げ「コレ母アちやまお父ちやまも餘所へ
い往ず大人ちうー坊も言ふ事少わどゐ目ん目を
拭き笑とてや喃母さまと膝ゐ擦られた岩へ最ど哀
しくて泣ドと為れど猶迫る涙と漸飲を込んで岩へ
坊ど言ふとを少き父さんい大人ちう為さるゐ母さ
んど何のまア泣ませう母さんい泣いせね泣ねと言ふ
さん口隠りて涙の雨と堰かねッ思いずよと伏沈め
た徳太郎い有漏ふくと目ゐい涙と溜ゐぐ〳〵笑顔

を作ッて父親の膝ゐすがり「父ちやま母ちやまい大
人しう為る程ゐ最表へい遊びゐ往ずお家ゐ居て百
人首のお歌を讀でやとの愛相い七歳未満も母親
ゐ歎りせードとの心より我ゐ機嫌を取ろと思へば流
石ゐ猛き清兵衛も涙の雨の一ト雫思いずわろりと
飜せーど氣を取り直して苦笑ひ「へ〳〵是坊よ父
さんい最どこへも往ず大人しう母さんと坊と庄吉と
して遊ぶからサア〳〵母さんも古機嫌と直ー目ん目

と拭てゐ獅子でも舞ひ宜いト言へば忙く徳太郎
「サアお太鼓を出しませう母ちやま撥で叩いてやト
母を慰め父親ゐ愛を求むる乞遣ひい西も東も
未だ知らぬ幼稚児ゐまで可愛やゐ幾その苦労
を為せるとゐ増してお岩い内気ゐ生質然れども
迂闊の性ゑあらねど長州侯や薩州侯の藩士ま
さい諸方の浪士さちが出這入りして寝泊りとも為
し事あれど攘夷鎖港のその話しい決して安さぬ

様ゐ云されど酒宴するい定武なる故醉が廻ると我
を忘れ幕吏が腰の拔しを讖り赤髯らが暴なる
所置を悪むより終ゐ話しい慷慨激烈ゐ亘るを以
て我とも勤王の徒と疾ゐ察し大和の天の川辺ゐ
て藤本鐵石氏らが討死しまと此程石見の生野
ゐく平野國臣氏らが俘虜となり特ゐ平野氏よ
りい手紙とも届けされど其度々ゐ朐を痛めるお
岩の顔色然れども是まで彼の事我言ぬい言ゐ

弥増る心の中ゞ察しられ不憫の者とゝ思ふりの
から小事と顧を大事と過つとありてゝ同志へ濟
ねを歩明て宜う言れず却つて餘計る苦と掛るう
彼をうり家族へ案ドと為せても清水の月照御坊
と始めとして同盟の徒の事と遂ず半途ふ果るを
えるふたけ十ふ七分い我もまゝ幕吏の刀の錆と
成りるん着目るれを丈も本懐然れども お岩や子
供らの後の歎きい何をうり斯様りゝ事ゞ有るれを

何故始めから知らして呉ぬと母やお岩ふ怨まる
るゞ黄泉の障りエ何の已ゞ死ざして親ハをても
子ハ育つ然ハ言へ徳太郎や庄吉ハと心ゝ思へを
兄の顔弟の寐顔を覗きえんてポロリと雛す涙の雫
歯と食ひ為ゞつて吐息つき「お岩酒ゞ燗をして
呉れ徳よ太鼓ホイ庄吉ゞ目を覚しゝぞオ宜子ゞゝ

春雨文庫第五編巻之上終